

話心

第9回



たまたま たまたま
偶々? or 適々?

から車はうちに止めてていいよ」と優しいお言葉。現地に着くと母の記憶も蘇る「おせえよ…」と思いはがら香を焚き経を誦した。先祖代々のお墓とは別にその方だけ別に石塔を建て懇ろに供養してあった。こびり付いた苔を削り、俗名と「昭和三年旧五月十三日」という命日をメモって帰路についた。夜になつてふと「あ…享年のどこ削って確認すんのタマタマ忘れてた」と気づき、明日もう一回行って見てこようかと思案しているうちに「ところで昭和三年の旧五月十三日って今の暦で言うとなんぞ何日だ?」と思い、調べてみるとなんと翌日の六月三十日、しかもタマタマ九十回忌に当たっていた。すぐに母に電話し、翌日大雨の中再び母と二人で向かう。するとタマタマ墓参の間だけ雨が止んだ。そして帰りに昨日車を止めさせて貰ったお宅にお菓子を持っていくと、タマタマ今日出て来られたのは母が何十年ぶりかに会う母の同級生だった。

「偶々」は「適々」とも書く。

俺の母方には二人の祖母がいる。実家の母からすれば所謂生みの親と育ての親。生みの親のタツヨ婆ちゃんは二十六歳の若さで結婚に罹りこの世を去った。二人の子どものこと等、さぞ未練であったろうと察する。育ての親であるツイノ婆ちゃんの命日が六月二十九日だったので母に連絡し二人で墓参した。その道すがらご先祖さんの色々な話を聞いていると、タツヨ婆ちゃんの長兄はタマタマ不幸な事件に巻き込まれて亡くなっていることがわかった。若い頃に聞いてはいたものまだ興味もなく聞き流していたがそんなに近い人だったのかと思ひ、そう遠くない場所にその方のお墓もあるということでもちらも行くことにした。母の幼い頃の記憶だけが頼りで中々墓所を見つめることが出来なかったが、タマタマ通りがかった家から出てきた男性に聞くと「すぐそこだよ、道が狭い



住職 松竹正純 さん = 文
(まつたけしょうじゆん)

- 昭和44年 大阪府堺市生まれ
- 大黒山徳性寺住職(雲仙市)
- 23歳で、北米大陸をオートバイで縦断。
- 様々な職業を経て、28歳で出家得度。